

<和田岬砲台>

◇諸元等



砲台外観⁴⁾

所在地：兵庫県神戸市兵庫区和田崎町一丁目1番1号

三菱重工 神戸造船所 神戸工場 構内

構造：外部 石堡塔（円筒型石積み、漆喰塗）

内部 木造2階

屋根屋上 油漆喰砂利土突き固め厚さ1.2m

規模：高さ 11.5m 下部直径 15m 上部直径 14m

設備：砲眼 11門（2階）16門（屋上）

1階 弾薬庫 井戸（深さ5.2メートル 砲身冷却用）

建設：1863～1864年

設計 軍艦奉行 勝海舟 軍艦方 佐藤与之助

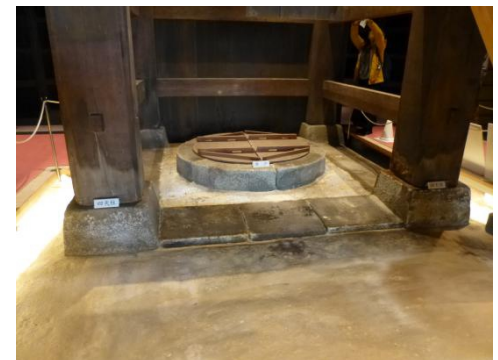
工事 御台場築立御用掛 松平信敏

請負 嘉納次郎作(御影廻船業者)

職人 石工 大工 船大工 左官 鍛冶 鋳物師

◇沿革と歴史的背景

日本は江戸末期 外国艦船の脅威に備え全国に1000ともいう「台場」を築いた。大阪湾岸にも諸大名が100基を超えて砲台を築いたが、川崎（湊川）・和田岬・西宮・今津は特別に徳川幕府が外国や諸大名に「将軍の武威」を見せつけるために自ら整備した。石造の頑丈な円筒型石堡塔で艦砲による攻撃をしのぎ、有利な高所からの大砲で異国船を迎え撃つ構えのものであった。完成には約1年半の月日と、2万5千両の費用を要した。



内部 石堡内面と木造2階構造
火薬と砲弾の棚
砲身冷却用井戸



大阪湾岸および周辺地域の台場²⁾

勝海舟が1860年（万延元年）に咸臨丸でサンフランシスコに上陸した際の要塞を参考にしたのではないかとされている。石堡塔の周囲には東西 95m、南北120m、高さ 4mの星形の土塁が築かれ、8門の砲座が造られた。実際に大砲が装備されることはなかった。

1872年（明治5年）和田岬砲台は兵庫県令により祝砲台として保存することが決まり1897年（明治30年）には三菱合資会社を買収された。

1921年（大正10年）3月3日には兵庫県下における史跡第1号に指定された後、昭和初めにかけて「昭和の大修理」が行われた。

淡路大震災にも耐えたが、内部の木造部分の傷みが著しいため、内部の全解体修理や外郭部の石造部分の修理などを行う平成の大修理が2009年（平成21年）に始まり、2014年（平成26年）3月末に完工した。



右下 砲台とそれを囲む星形土塁³⁾

◇特徴

基礎は上部直径 29m、下部 21.5mの円形、深さ 2.7mの掘削が行われ、約1,000本ともいわれる長さ 2.7mから 5.4mの松杭が打たれ、胴木、盤木が造られてその上に基礎石が敷き詰められている。石造部分は瀬戸内海の塩飽諸島の御影石を、また木造部位は神戸の布引・鉄拐等の山から伐採したけやき材を使用している。当初外壁は石の上に厚さ9cmの鼠色漆喰で覆われ、屋上には木製床の上に厚さ1.2mの三和土が盛られていた。その後鉄骨屋根がかけられた。使用された石の重さは3,000tとされている。入念な基礎づくりは上部の重量を支え、大地震時にも傾斜変形などを防いだものと考えられる。

内部には砲弾や火薬を保管し金具やロープで砲座までこれらを搬送するための工夫を施している。2階床には砲身冷却後の排水やリセットのために中心から周囲に向けた傾斜をつけている。

◇文化的価値

場所、構造等は幕末時代を想像させる希少な現在する具体的建造物で兵庫県第1号国指定史跡である。この地は平安時代から発展してきた兵庫地域の重要性を表し、建設も地域で活躍していた北前船などの船大工、鍛冶などの優れた職人状況を想起させる。また目視できないが石堡の石と石をつなぐ金具、内部構築や設備のために使用された各種の金具も写真資料などで見ることができる。

湊川・今津の砲台はすでに取り壊され、西宮の砲台も内部が焼失し石郭のみとなり、現在和田岬砲台のみが当時のままの面影を残している。

◇参考文献

- 1) 史跡和田岬砲台 編集神戸市教育委員会 発行三菱重工神戸造船所
- 2) 和田岬砲台史跡指定100年記念 大阪湾の防備と台場展図録 神戸市立博物館
- 3) 湊川隧道展示物
- 4) <https://www.mhi.com/jp/company/aboutmhi/museum/wadamisaki>
- 5) <https://www.feel-kobe.jp/event/12878/>
- 6) <http://city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/hyogo/shoukai/img/23.12wadamisakihoudaiPDF.pdf>